[illegible]

へ 5
2218

詠三首倭哥

知人

春月

月みるもまことなかれ
老の身ハまに下露も
ねしのこゝろとて

帰雁

なつかしとおもふわかれもしらた

藤野潔氏遺愛之記

門へ 5 2218

ろわきて人のまなぶ
至りなる也

戀枕

いく和ちらあ夢錦おりし
うちとけてふしあかつきの
木乃かつらなる

飛鳥井二楽軒雅綱之画賛

世に狂哥といひてかしましき

ともをとりてうたひ文字つゞけ乃
時ふりなくるをもてあそびて其
狂言くといへるいづしおよび
此狂とさしる一字謙退の詞と
きけりやらんかれ詠ミ出る乃
筆意いふからも狂の字の旨趣
なくゝりなる骨肉をこそのぞく
まめあれなし古今和歌信中
別儀を生興をうしなふ家
詠歌のみちを犯して五倫をそ
むけるをもて世中に傳ふる
比丘などの戒律のあやまりて

なし置あへても胸せばくみえて
猶さりすけなくしぶみけて
却而退らしおみてもしの上
をはりしびれをあるなるを
対父母のみならず言むかし
謝清て生いかなかの言も
乃不可思儀なしと之教
乃文え称名双紙にても一生
ちしなりけりを心あるへき
拐りけり心なき人は孫を
せずて己が勝ほよりて
見ひて師範をしにさせ

是此乃千労して物我の集
なるのゆるの子も人にと恥ゝ
といてもうみ悔あるゝ人趣
諸房のいきよゆりをやすん
せのもしうそ私ゝ心を推て
弟夫合の指折十余の後
のちにもしうわれ十者
かきのちにもしまえ卿
二十余の頃を追ひよるとく
けなる我るとも何にもく
つりてもたしうの酒醒
ゆかんしかぬくよも仰る

元禄十丁丑総招涼偶居書

晋其角

予が家

た　　其角

七種や明ぬる年乃枕かと

殿りはうたる松ゝの音　　介我

まれ〳〵家根のみしらぬかざり　　堤亭

中

七十や餅にかゞへて

一つ ふたつあまる凡巾の骨　　同

其角

中指の皺てしめる百子ゐる
たり　可我

七艸もとらく宅や猫の妻　仝

海苔の白らむまであぶり篭　悦亭

神鳴もくんのさゝ縁おろす　白角

古田の何某ハ斃場のちりかくしまの
あるし茶酌なれと茶を接む
卯そて一曲をうたひて
夫平乃おきをさうるま

門錺いつも尺八竹もなし　行露

祝三夫婦

松竹や昇かへる数作　彫棠

若菜乃海も十法そろふん　岩翁

菴のまゝ障子明くる笠知れ　嵐吟

とゝつよ

冬の豆経かいとりて揃ひ　此庵

豆二つや数のまゐる万代かな　夜錦

七くさや拍子おとゝ子の揺り釜　湖月
翹持舞のうちを小畠もし　林也
なかくはえ笑之んや桜陰　我常
流橋乃下ふ浮ふくや宝舟　青山

禾窓

戸はしめてんぞ咲花の節向　赤山
くれ様まで見るしましの梅　杉橋
けもとり同人之門垣の雪　波麦

飯米さへ炊もてもなき乃ゝ　一十竹
私やぶ苗代ゐのうちに網　兎谷
年ほおもし俵まで深れ小橋に　之月
旅人の水店まで杉々ふ　堤亭
心こハ切ぐ桑まで柳ほ　波麦
まゝ柳や梅のうちへ併帆舟　秋航

自悟

誰か嚙て子猫を跳るへは　其角

詠松島就存の哥

杓把の芽に枝のつく遠浅かな　千調

麻の色はわすれて春の月　清風

もちつき歩く翁の日和かな　當白

一たおり翁も高し清水かな　素稲

旭影鴻田麻よりもひかり　岩翁

まんまいふ郡ひもとく声も

初草のゑくみしより蘚かり　其角

うくひすや餅に糞する縁の上　翁

笑や黒ふさえぬ盆世見　紫紅

雛や十日過ても同しかほ　其角

米寿はふ息子花ある椿かな　游帆

上巳

あまつ手の出深し奥世屋　さくら

みしんや汲千の道のあかに　昌川

着ちかへて見世に洗ふ盃一杯　等悦

きさらぎの女の手也田植綿　介我
曲ありや笠ほちらす大ゆふだち　其角
紅粉貝のむき身や桃の色　波麦
　門は御代乃山にしてちれと
　うき世の月も世のかれし
酒ならぬ山から花しらぬ鉄　東潮
山ならし荒流に上戸ハ水くそ　孫子
取かゝ宮に祈のさかえかな　紫紅

物むかしより越へて
　名はよいハつゐのしものゝ海かハ
　つしゝかりな桶とものもの
桶ともの乃もしおもし水上越後　行露
饅頭の人をとをはるから梅　其角
白うるし垣をとれむの陰　梅樽
傘も梅をとむる風の人　闇指
鞍鞘の毛すゝみの梅搖　兎谷
花の雨のあるつまへて隠　粛山

はる雨も肩のあたりやもゝの宿　岑所

片荷つるさ酒を振らる花の陰　万巻

松島やしまある島ハ守さくら　沾徳

みよしのを世と遁れてもあそふ人　蘭開

岩根くれとも

桜川我も曲尺（しやくく）の作りけり　露沾

もちりて煮桜も法乃句かな　（女）此友

万日の人のちりえや塗桜　其角

子文のところや珠数の色　紫紅

風ふけや菜畠通る梅の花　枕字

春の夜や牛合見えて太宰府　ゑ角

花のもとものまゝ心に　尚白

[illegible]　蘭関

わすれても[illegible]　霈笑

出るや丈をこれし丁字十　万巻

出るやはなれし王孔のうへ　赤山

伯はむつ嵐雪の追善して
たちもかけの白雪を悼みて
折ふしの涙もしとも此席　其角
処きらしくあすのやけはあらしと
十蒔の暮として垣根もしらまえて
萎の芽乃垣ちらぬやまふのかな　紀流

志賀さきの今熊野乃玉むさしの
花園くらおりてもまなかしみを
山びのはいまで井出そのよう
まりう浦のしくとみ伸しのなし
なりう蓑　御家の例をちら
りの氏人乃猿しもまる
ともかまはひそ　行露

御袷ふみつよかぎのまへ
詠めるハ雪のゆきの卯花　秋鄰
曝しをも抱ハ力ハ乳母ときりとし　其角

一ふところ給ふとうつる也　元甫
水鶏のなく
笈陰やみゆるさらしなの山　去来
にほひもついてとまるかんこ鳥　拙女
うつしかえたる轆轤まで翁　波琴
仮り場の屐(ハキモノ)見えしぬ田植かな　一雁
継母に
のちの世もやさしきいさ花卯木　当吟

若き気つよめ独の時をりけ　山蛾
初あらしや言るもれて時ゑ入　仝
音子忘句の癖あり
酒のんて舟の流れ流れに　盲人 梅遊
むかしなた昔もかはらぬ二つの山
師へて西ふ限りひはみち
立月見て四咎よりてなごりの山　闇指
二川のかく
蚊ゐち程かし蚊縄や夜の床　仝

研上ての小刀涼しき種かな　麦林

古寺無人迹

狸とも鼓こそきけ涼しさよ　紫貞

二月吉日とて児橋り
剃髪入醫門手紙す

さつむすぶ狐の文の返し哉

浄土經のあらましすゝむ狸が白狐

故ッ後先ッとくて涅槃のひゞり

くやしきは人の心もたゆみけれ

人と世と揺さふる巫醫の心たとせ哉

歌舞心ち　何列

楠の檀めでのまゝし牡丹かな　其角

此ふかみことに思ひ手折哉　呂以

介我手盃盤

二盃目にはくらむ杖の白なり　岩翁

人のいくそとしをそして

旬の氣すき梳花千園子　其雫

四文の祿をも出るをの法務かな　許六

あるかたよりあさかほゑかきたる扇
にきんのそへられけれは

蕣草や扇の骨を垣根に　乙由

とみにしまりたるしかつ〇て
はる筆給ひけるにおもほへす
きんのを中せの一冊をとこそ
やりまて

涼しさにつとまはし女かな　仝

偕楽園のこゝろを

庭とりも立ゐくらし森稞　一岩

躑躅さへ咲て柏子や夜乃市　闇指

夜寒に兎の尾なくしけり　亭水

山畑やかくしあるてのまよ繰わ　老尼 松吟

稲むしろ通ひ路乃ひろさ哉　浪化

重九

盃の菊のとゝまるや肴の上　芳仍

垣代（カイシロ）やおもしろねるゝの菊　棠和

夕やみや名花の稜はかゝる　一江

小土器に味噌の付しけるを
あたゝめもおろし国やしてあ
の月はつけしひとゝもとて心
ひろふにこゝろほかものゝ
ほの見ゆ金谷乃方の雁や　行露
白雲もそるゝ所の通し路八雁　其角
松竹風の庭にしさゝ舟の上を地
うつして蔦ふ松もこそのまうて
すてたる中にしたゝち物葺を
ひまむしして都乃土や葺持　仝

榎島に雨と森入やなみ木立　正礼
柿乃とも寺ハ猫気かゝり　山夕
はるゝ〳〵鎌倉まゝ晴るゝ　波参
ゆふまつれの雷　郭公　春澄
子規くるのこゝや　苗二葉　宗水
下ヶ髪やにんくてある鵜　其雫
白川やけんとんまゐて鳴る　瑞亭
子もかまれ枕をかまれ新タ　之角

画ニ竹ノ自讃

ふらすとも竹植る日ハ蓑と笠　翁

思のまゝなる桃隣みつのそく
たゝまして祖翁のをしへ(?)を
をさ異例以のおもて何ゝしの
おもふ竹抱せしを悌よいさのび
以ゐらなる文とも送りしふ力を
添へまとし

無為(?)か食養性や凡畠　之用

みな口や萱の穂あり杜若　其雫

門口や十ころ子石あるき立りけり　堤亭

拙女入物のころもとんとんて
白雨やまりせとも出世た嵐の子
とや出むれたまりして

自由やまりされ人の長る訳　圖指

中つなや春(?)らく門乃菜畠　幽之

ゆつるちや深(?)手出ところとん　許六

まつ元やまめひしき一年し　境亭

晩を弓手に取る暑かな　邨棠

石餅の綾りもむ見かな　圓梧

同律形浪錦千

打子千同舎我や昼練る　其角

先吹しふらくいまて出るかと

はやしおみやまるゝ子や　同

聴蔵の絃ハ巳日乃斗老ハ

小利口ふうてつけり鰹かな　北亭

清かれや麦焦るの摺鉢　一江

赤山子乃ましき扉を採雪より

琴ト笙ト太鼓ト讃のもとめ有し小

敬義やゐもむろらく聲此者　翁

みるひろつまるはして

山のこゝろも龍しめく

左

青海や太鼓ゆるきなる其乃声　素堂

右

ふしのゆへ相乃にほひや笙の音　其角

直方点より

まちつけし新茶のにほひや

左右月士　岩翁

業平の鎌倉首かとしり笠　自悦

卯もつ鳥のなるふ紙子　巳応

垢すり無し

まてまるふ小判投かり　康讃

涼しさにあるひてこれて暑く　之角

むすくと毛毬かゆし多涼　巳恵

元九　七年小冊をしるく

その菊奴僕ヅブテとめしよ入れ　来山

子規ゆかしくてゐて君か佳　紫石

容至　市遠無兼味と　杜甫

鸚鵡も此世の境や夢の花　之角

或人大あゐのゐくるを二三千引

さつて盃をしかハひさびのまく

内ハ朱ふなつて鮮口おもしく陶を

うせて有るを旅給かとき侍る

清れ親李白の面なかりかり　仝

かゝる月鼻たかふせんのめてし

逅ニス再貴ク

出嬪とともにみてら綵ト　紫孔

懐ト寐息のさけれしまかり　酷止

摩ちむや向ひて人ハ独あ　合

大根の太根とてふかしくるに　当白

雉子待門ニ

ひろくて娘の成や見て　楓　許お

褻ニ白ス襲ニシくして

此楚のよりくてから火燵より　是橋

北枳南橘のふるまいのことく父への

骨ありて術をあそひてこの郷

つをといへて出るをつかやく之

逆のしてみあるめあつまて

あらそんより到るも無き

いの脈は不又本草乃喘ト　其角

このあそあるのえと是橋と

あとらあかりとらり

錺錬乃脇をうくるよ神ホノ　紫孔

史記華陀傳至於刳割腸剖臆刮骨
續節之神奇云々

旅泊

蓑笠乃ちぎれをつゞりて　旅柏

比ゝ川と流るゝ月も　行航

宿ふるや水る山の時雨　公

暁の寒へ飛をみて涼しまれ　我帯

大ぶねや櫓にかゝりつる時雨　可朴

鼻紙の落しところ近よや舟の中　一燒

病後遇中秋月

名月の海を呑うか今の命　粛山

千瓢みつけの小指や指の股　當吟

みの風やうらし隠鉢の手探ハ　行義

韓退之捨酒の吟あり

酒投(ホカ)ハ舟ちどりやむ涼ハ　光角

御丁や南のひるのきもの下　松嶺

こゝろ招きて海士人の月夜かな　西鷺

舟中ニ吟

柳にみ嬢ひさしを食の蠅　北亭

とばしと牛を屏風に壮かな　横几

酔をさに神はつしの蓋かな　幽竹

むつしく帽子着るゝかすかな　凡喬

江北路

篠島をとかう世に拵え猿蘇　浪化

定家のさても違ひの奇に咲　示考

堀りくしわか西望む　瑛子首　蘭宮

帆の中一派よう旅なる　游帆

あらんかの枝を去るかさくら　一境

枝垂へ小渡りも文字折く　可朴

天のをたちり見ゐる咲小伏　淑東

野航蛤得二三人

鴨小野々鴎とちりん舟の中　残光

あらし山女の　塔沢に入て見つけたり

山笹の粽や巻て結ひ込み　其角

切口もしのゝめちかき夕かな　介我

みのもへ入て

住人と人々の尊く蝶の身　去来

いそとんて蚤ハ千秋残るらん　一境

こゝは京をうけし

家竹に芙ツかくひまく花錦なり　秋航

於岩城吾昌寺七間半四面之破損物々見物奇異之多縁甚以感之

うくひすや副の柱も堂の外

仙人も渋落はしかれぬ　秋航

賞蘭

御帰りも葉に香をつく七日かな　仝

雨後　丙子のとし

咲こほて石をぬめりの橋もせ　其角

由布むと毒やなかれ行の川　沾徳

明かりとも稲打ちる銀河　秋航
眼鏡より扇でこゆる天川　紙常
星合の縁まで出れあひより　薯子
燕乃ぬけてもゆるまで川　山城

但苦炎熱
凡むして猿ふくいする木陰　左角
伐きくこの世すてゝふ年
あつて色々不むすれ知らん
李節や母もとなて伏まる　全

光廣て御集見侍るに
百年までこれんとて不刀をも
人をつゝまず出かれし
いかなる金をきさむらひて少月の
さもそう／＼のをしみ百まで
わかし一江かり土産をひて
おなかしきを送る西恨
鰹ふ光　姐箸とし　袖でかく　左角
香炉おの手をあたらしくみや
箒いとう虫も秋の打やむ箆　緋く

酒醉しらずてしも下戸もみし
研師して鏡ゟ刃をもあつく
ともに已をあやまらん
ひとりと山寺つき一ヶ條ゟ一十行
多くのみ濱をもちて宮に八社の印水
小みかる帆子の尾や浪路に綴
丙子の山もし月のまつりこそ素几
紫おもちなる汝茅のからの
出山るみちそひはりて葉をつき
苣をかきみ旅のとそうにきし

那須の原やはしむ多つぎきの
うしろそる畠、もりたつに宅末
あふさかのちずるかかくりて
びらはあみしよりて江れし蛙の六
分そりなるが見まい糸のつかい
腮つらねしてられ見えて正
鴨の茅萱もむ神中おの後
つかさうしかれやこてしれとりてみな
みもさんにか花ちかとさらむきし小
まふるうへおみとし丹出乃
蛙の手らにても杨のをしの劇雨
ほしてかるのこもさうしたの見

風除中 雨の寧をせんと志ありけるに
此しほ深なれば隠すもよし
無句を深く誹文とは
菜笠をつむ女も春雪の 元角

口中牙痛を治んとや
呢(ニロクリ)手八翁ゆくつを思ひ出 何瓜
飛石を踏隠れあれば蛙かな 秋航
菜(キタナ)摘せあらいつかな 菜雨
人も来て水あ目なる蛇の庵 星泉

曙の母をひくて坂やりに 山路
明しかの手植の森蛙かな 東水
七夕やよくもゆら木の末より 一雁
七夕や家も子なれて何の筆を 階止
味の乃故の出堀や松ふ 彫也
桜れこさるよりより千鳥 一十竹
湖月磨て あるよ
春風も讃すくなりも芙蓉 岩翁

踏二君迹一

松高く灰を屋ねる日さかり　我常

氣もかよふ涼しさ涼しさ　楚舟

舟中乃布袋をとらまへて懐

引流る杖の揖ふ似たる翁のさんふ　[illegible]

月みるも杖につかえける小舟哉　之角

爰は何の奥らやとも[illegible]や

わらくよきをのか陀羅尼やせきの声　鹿梢

懐手あそく池のさゝ波るを鶯　秋芝

二月乃中す捨ん菖乃苗　素山

雉やむ田の水のぬるより　根杏

諸和や毘沙門遠き茶屋　楚風

翻翻し人乃心乃麻生ふ　彫棠

佛心娃仟鼻をも花ちる　志良

茶仲るゆるもとなまて

本まぬもら只さく花見る旅人　黄山

ゟ人乃まくつるはちやうんこゝろ　翠袖

まつまつんの時もしし
恐はらとはいふらしきれと
楢や笆ゝ峰をとぬる口　桃隣

悼亡婦

油さし燈なくしせ家の月　木奴

閨怨

心あてにおもふ夜多住居　同

簾ふりまた捨のかぶろ乃丈ぱ久ノ　落霞

病後

毒断の梅よ入りて衣之　尺艸

商陸乃花ふみつきりたり月雨　嵐蘭

別恋

冷る蚊也ぬとるる家煙す　志良

菊刈や鼻うも指按女うも　木奴

秋鼻ふくさむさく菊抱　其角

りとの虫の口まで小とゆる坂八丈ツ　彫棠

ゆかしさや稲の名とふる本六人　天艸

板橋乃夜明ちる凡のちりかな　穹風

白雨や小路ちはるゝわけ舟　極条

能しくや畑代に萩小田掛笠　黄山

その藪に出すや浅やそもりぬ　衡山

古城や蚊なちしほたる刈舟　薯子

　　鵜乃なるゝ川をわりて

杜父魚(カクフツ)や何うきに落て腹鼓　揺之

星合や女庵主の白き立　口遊

花鞠乃心あるさま也星祭　常仍

月しあらはや人の心を凡ならす　其角

何鹿川のくりかへし天川　分紙

出かゝれの舟を迎へて天川　翠袖

中又や帆柱みに逸ふて判の磯　一江

　　卒にいふ作田の師あり

月のぬるゝまれてありの蕗哉　同律

柳緑ニ出たる僧門出て衣の
中なり緑色ありそれ花なりかれ
授記品ニし
不覚内衣裏　有無價宝珠と
とらせけるよりくしける
衣なる珠ともしらでや玉祭　其角

新盆
こゝろに掛胸の哉て玉祭　氏孝
十六日のあはれ
芙柳もことしきり舟乃影哉　東順

秋の声佐夜乃中山山家　尚白
大名ちと扣のしるき居払　許六
松島より立かへりて
新たる姿や見るもくるしん病上り　桃隣
舞州やわらし國の片あつま　暑子
華山や高柳もみある面かり　客旅

歳暮蕣　各二字三字

はらわたや蒼かれて皆みれ　幽之
蕣や没日みかれを一枝　一雈
蕣の落しおくや皆乃出　勝也
新歳の小町なりける夕かな　拙交
槿やかいはりくくまる帚　一江
新息や油を借りに垣ゐるら　山蜂
あさかほや垣の家ハ皆みれ　丁分

蕣の日を待ッ蔓やくれの作　紫紅
帳ッてさ又歳新みち居かな　我青
新負や間しつかむるを目皆　是橘
あさかほや毛腰抱て宿子名そ　鹿石
吉原乃新歳はかり皆てよ　岩翁
朝鮮のあさかほ皆こ日入日し　秋航
蕣やくれに咲出た磨かん　丹子
槿に操包百れ　鶏跡かな　婚腰

秋都ふ家東ゝ住乃文へかゝ　其角
ありけれとて挪さかしかもすゝめれハ
ともしのなかに一る丈秋とかひのものも
うけとりしこれ月のはしめなかりき
なかさく志はきてくゆしけるみえ
はるをいてみてゆきてしまし秋乃
色をはなるまや家のるすよりかへ

秋さむのいろみやりつるもの色　翁

かゝれと上旋ら浅耕しからけれし
あの年のなかしや病起の初雪の
ゐるし　一聯二句の格也句ヲ呼テ名とし

悼嵐蘭詞

金革をしとねとしてしぬるともたゆまさるハ武
士の志し文質彬々として君子の
いさをしといふ松倉嵐蘭ハ常に此二つを胸に
賓として膾炙の老荘を魂にかけて風雅
を肺肝乃間にあそはしむ自ら知る十
とせ餘九とせまや此ころせそろ官を辞
して岩洞に先哭の跡をたつねんとおもふに
とも老母を存して雅子に跡をおもふとて
いまた世波にしはしされとも栄辱乃境
にあらん日しはしなりけりとてこゝや
仲秋中の三日由井金沢の浦の旅に

月影をみやりて鎌倉の秋をなしけるのくる
時より心ちなやみけるとし孫息をつく井
七り乃夜の事なるや七十年の母中ゝ言
まかのみなり思ひのこしける事をも
なきよわるひの五十年をさきにたち後を
乃かれ玉ハ腰押切ても悔なしお袋のはら
なりよ我時あれ共と如くて家のをまと
むかうみし扇して口惜しもあるへきと
とてハの時の心をくみとりて悲しき母の
恨ミはしさの跡をしりてかぶりきて
供くみてひとへに親属のいのちばかりは
なかしむ月の末さりるを雅子のまかせられ

弟らあ居よ来りてこの様子号様子返
さまりしをとヽけの王或五寸の眼さしける
はりけれ我の家をなを突て岸我と
気つくその悦つる色に目のあたり様
さるほと次出る時むつまりしあまさせに
なくてそれハかなしのくるしみるゝ涙で
子のをとく手をはなさじく其の如く
家此お能たつハよう仰の慈の秋中
むすぼゝ枕もうちあくお井と
筆をそれてありいは迷人とるゝ様も才
つるなくいたみもすれと胸のつきけり
て只たゞしまつきまうるせてゆかるその

ちゝしぬるみて

秋風におれてかなしき桑の杖　芭蕉

初七墓にゆきて

みしやその七日ハ墓の三ヶ月　同

も月こそなかりけれとし

此悼の句は翁存生中病心にかなはし

くるしみにつかはされしとてそ惜かりけ

かなしく追善其ゆのことともさへおゝは

及し時も此机のうしろにおかれたるを

その手にまつる人々十七人の友なるを

仏さへしられおかしと見あらはりて侍る

ゆかしき遺文感情ほとしるこゝろの

追善とも思ひてこの集とし加へ侍るも

常我か孤遊をあはれむ

芋のちたも世々の秋なかれ　其角

七月十二日於翁墓前捻香拝書之

十月十二日深川長慶寺
芭蕉翁移墓回愁之吟　其角

時雨るゝやこゝも船頭も墓まいり
我も寒今年日の没(イリ)乃積　嵐所
薪見るも墓の坂乃足鐡もて　沾徳
ひとりつゝかれる志れをかなし　堤亭
孫もとくひさしみも夜の月　吟
牛ならてつよく車押露　角

御もいと柿もとちくを出て　亭
寺もものこゝくハ皆満入セ法
此舟や何しの譜でみる　紫紅
それのもゝかなや中は跡　言
抱く琵琶の弾池をあてる斤ホ鐙　角
此もう心もちまるの横　吟
何のみの尿もしてな涼来　迄
上田の中ふ秋まつ　紅

名月みせむと誘する送り舟哉　亭
夜ありてかの涼　惟高の紀　角
筆ぐり是小ふりして木笠　吟
百目の綿をさあさらりとは　法
十
呪くも障子の音や吉日転　又
鍬をおろして金釈ひる影　亭
雨三本ども当ておくしくれかな　角
柔まつはかくれでて寝かふ　吟

雨ふしの四もと本首の縫ふて　法
灰や肌ある焼飯乃皮　彫棠
宝ええやどさ乃鋪皇ねすとれ　亭
撫桜多くむ加茂の川縁　角
松山の赤い泥を石南らん　吟
石の火入や燃る嫦眉　亭
呼よせて泥ばちくむ台の月　角
御ぞうし花を虫の魂て　介我

雛形に一ツの音色を落ス　亭
川合しおれ候よ尺八　山川
野飼の馬が塚に化て四十年　我
桃も毛の稽古替る文字　九
笠とって杖に倚りして花の蔭　崇
金で千年色ぞ付るかしま　我

文字九記　　沙花所撰

貞享甲子の年あや河村瑞軒とよ
ひとのおほやけの作りにて難波古江
の切りかゝへ堀て舟路の自由あり
せんとの恵ミをうけ御船につくして
都鄙貴賤のものも商沢の歩みに
とりてありけるとそ申ちん
らく山をつきて川原になる

川谷となづけられたる名橋のあとハ
今ハ深田となりて封境をしる人(稀也)
ことふりにし寺なきとて今の物好(スキ)
なけれバなりけらずありけることを
其古杭をぬきとらんなどして笑ふ事なし
華やかに作りて奉裏までてりしとも
さらる諸の力に任せて此橋木を堀
出しは活古称義の凡推のみしも也

甚に類ひなき木目なりけれバ杉は
すくれ剖なりし杉せぬ名物とされけるに
はそら山の井など硯となせし浜荻など
条の柚子切りのやてみちのくの米の
あつくさへ見るを おりたりしをまるものハ
人毛の親もこのたびにあまし茶も人々の
許よそ一座の名所などあからさまにまし
珠みてうそ宝なるものもありて

当時の達人をして張構し文詞を
かざり和哥連誹の讃をなしくみちぬ
予も其数にくはゝる事此由故實ハ
いにしへをしらず今の宗匠を
あつめてもかなはざる時代に生れあふ人ゝの
上にして尊ふく此重器を鎮むる
悦びを述ぬ事の侘しさにそむかす
なかれとしるのみ

元る月ハすゞしく乃樗の杉目也
晋子書

舞山家

しら露や山の音ありて木立　密雅
帽も舳も浪に崩れて鴨川ぞ　水刀
新泥ゞあれハ畔となべて鉞　岩翁
純汁の湯をも白川に爰舟下　波琴
撞兎むすんだ形ある　雹　床　秋鄰

蕣もちりもちるを飾るなり　栄雲

さつまいもかくれ持ての擔賣　太泥

風妻ハこゝろ隠すみなかな　薯子

あせ小や響く小雪かゝく稲の露　袖

瘭疽痕夜なかうらき秋かな　蘭図

かゝしや竹田へ帰る雲のくせ　己角

湖へ沈む一舟小呼ぶ秋かな　川子

惣せみも啼眠り見竹篭香　桃雪

竹房かくて紙子の表門　岩翁

乞食おて乞食よくも盆供かな　翅輪

柳陰や小僧は秋を持なかり　同律

情ヲ寄ハ托ス帰燕ニ

まくらす蓮の巣は土ほとり　彫棠

蜉蝣や安房をみやる橋の上　東潮

川鵜や蓼からふくし鳥かな　竹巻

良夜に琵琶を奏して京を得陽
乃君とあそひなせ酒をくみ灯をかゝけ
せし深文いやましかもて両の心にうこ
かしその耳をそそくりかな感あり
かの千こゑりして陽なるはるし曹保ハ
秘曲をさゝけ人を泣しむるに似たる
すさひもてあそはゞみるにもてさこの在
国ゝなるはしん(テ)をたえ声をひろむる者ハ
すくなくしてもしかと秘をあそひまれ
うく無限情の(く)一藝ありやといへと

十五夜の酒を呑まぬ人の月　〻角

一條の灰釣りしもたへ乃月　秋航
上下てるも上にも流石月乃あと　楽之
雨のりてかけ出れ色もかへのりて　拙文
袋井を出てなかめかゝけよの月　彫棠
名月や小海老あつまりて東水汰　我常
名月や椋もあをし水色の底　当所
名月や虫かはりつつ鶴九ケ丸　雁谷
名月やわか出て人にさへなむ　沾徳

武蔵野九月のはし置や須磨の石　如流

鞍をやはらかにひとり
月さへ見あかくれけく
厩干しもなひ作りぬ

名月も野分にこぼるゝ高砂面　行誘

草のいほ里恋ゆかりにありんと
こゝろ結びしをゆてゝくさの露く
ともよふれしまおもふれるゝし

名月やとりやくるふ袖几帳　元角

篠出し小海の面乃月見哉　雲洞

高ふの船の名よせも月見哉　梅橋

名月や八日乃霧雨三番三　一江

虫の氣てまて雁が原の月見哉　一雀

瘦る人を蝿てせかしにその月　需笑

竿はて肥りやみゆる水乃くま　可朴一

名月や彩色よき膳乃上　巴山

餅くて祇箔をもふくみて　一十竹

名ところ坐麦へ出る土大根　蘭貫

むかし里へ中りもとの月　洲荻

見あきさへ恋ハ手向女の秋　秋色

名月ハ庭一ぱいの小松かな　松吟

五六人並んで出村の月見哉　利合

小西仙や蔓豆立て分の月　文梁

赤き色流れて宇中月の限　巨宗

いせより結ふ屋の比くらへを江戸へ
こゝろさし十二月十三日舟出
して三月廿日あまりにて着船
志らるゝをうらみて

新酒も花見さかりや舟の上　口遊

糸一ツ飛うかりし猿の声　桟一

名きくてよまうれて

名月や我宅案の門さかれ　東明

うてくと嗅て包るや菌狩　山啄

倒かさるいつの山家し　紫雫

桜から桜にうつる目のさかり　波麦

草庵吟

うら窓の枝に東向　鳴吟

鶯や藪のそと道橋の下　汲子

病中の消息

鶯も舌を乾して飯は酒　紫雫

浮魚の底に寒さを春の月　翠袖

姐の脚おもふ涼し夜肴　曲翠

夕立に橋新しき木のにほひ　水刀

ありし代乃茶のゆかしもつらし

すゞしさや欄干かし公儀橋　堤亭

いそがしく清水とこ乃手お橋

橋るまかそんとかこも通し　文甫

番町のお堀はすゞやんこ高　紫雫

初鯨妻午瀬乃ひかり哉　太泥

むら雨や床柱みるもせて色　波麦

黒谷にまうでし拝什物

蓮生ときこえし人の鎧を拝みて　乙耳

宇津の宮弥三郎頼綱出家して実信房

蓮生と名乗る此人新勅撰集にも入たる哥人也

熊谷入道とは是や別なりけり

月の夜の蚕のせなに出る男かな　薯子

武家は人斗おもしろ大切鎧　袈袖

この石乃根ちかいつくさ苔清水　水刀

招草や笠一つとりし実の大殊　柴栗

御札も御手にかゝりぬ冬の蓮　薯子

耳掻や隠してみるも子孫繁昌　孤子

もつゆき三句

初雪やうらはおもての萩の枝　当吟

もつ雪や上下ともに途中なり　洁法

初雪や雀の枝ぶりの小土器　其角

葉をのまゝ冷えてし

比叡下ろし護摩供養はする夜なか　景帘

落柿舎へつかはす文のはし

放しよと口をくらゐや兎　鳶　去来

ほかにあるしこへ身をまかせし
餘りに手なまつきよしとほりて
歆我の耶野ゝ鶏よ伴に浴て
作る　其角

脇息にあのをれど山ぞ下り
もとよりん根の湯のかおし

ゐの味仕つかまつる士は営　ほか

志ろしゆ男盛の春立て　角

贈晋渉川先生書

去来問師の風雅見及ぶところすでに数度々の変ありし変して門人の其流に浴せんとするを執へり我是を古翁に学びに千歳不易一時流行の両端あり不易を志さむハ流行にうつらずといふ事なし一時に秀るものは其口質の時にあへるのミにて他日の流行にいたりてハ一歩もあゆむ事あたハず退然るに師ハ蕉門の高弟と翁の吟跡を追ひしかと流と法とのまなひ日々の根ざしなれど　翁の日凡天下ニ師とするものハ先己が形位を定めされて

人親くえり所あり一言う句旅の手と為る
くらは多故よして人たをはくまりぬくのふ文
我老吟を其なかくしたき蝶の風あり
家して猿みのくんろのを悦へる狂なる形り
ともコく風雅の稗を志しえ皆り風興を
さ為しの可く　来曰翁の言ふ人すへうく
出録りといへとも瑯譜をあるへししを
入れて今と氷雪のいさまよきさも止ッて
うこうさる的を得猿をあせう今自乃
諸生の為う流りをとゝめて古格を
路あすんた晋子を剣の菜刀なりとぜん
翁の曰晋今ならなのしをなほすとゝいふ
ともり来ゑこるくの風流を吐出されと

後引らり去来曰さはる有て是を称
りと内あうんる秘歌くのことつたへき
及ぬ翁なくなりぬひてむなしく四とせの
春秋をつめり今先生と東西をせき素乃
限ことをいへともいまる家松栢
翁格のよふひをとゝまりう幸こうにて
わうえ此時なり是ぬう秘抄をとして
古翁の言を記しぬ先生これを案下さ
さしはさん事をねかふ

丁丑仲夏初二

落柿舎嵯峨去来稿